

一 わらはやみにわづらひ給ひて、よろ
づにまじなひ加持^{かぢ}な^ぢんどせさせ給へ
ど^し驗^しなくて、あまたたびおこり給う
ければ、ある人「北山^{ほくさん}になんなが
し寺といふ所に、かしこき行^{おこなひ}人侍
る。去年^{こぞ}の夏も世におこりて、人々
まじなひわづらひしを、やがてとゞ
むるたぐひあまた侍りき。^しこら
かしつる時は、うたて侍るをとくこ
そ試みさせ給はめ」など聞ゆれば、
召^{つか}しに遣はしたるに、老いかゞまり

通釈 (源氏は) おこりにお苦しみになつて、いろく
とまじないや加持などおさせになるけれど、効験がなくて、
何度も発作がおこりなされたので、ある人が、「北山に何某寺
という所に、尊い行者がおります。去年の夏にも(わらわや
みが)流行して、人々がまじな(つてもまじな)いかね(て、
ききめがあらわれなかつ)たのを、(その行者がまじなうと)
たぐちに止める例がたくさんございました。(病氣を) やり
そこなわせてしまう時は困るものでございませうから、早く
(その行者の験の力を) おためしなさるのがよろしいでし
う。」などと申し上げるので、(その行者を) 召しに(人を)
遣わしていたが、(行者は) 年老いて腰も曲がって、僧房の外
にも出ませんと(源氏からの使に対して) 申しているので、
(源氏は) 「仕方がない。(私の方から) こっそり(人目にた
たぬように) 行こう。」と仰せになつて、御供に親しい(家来
せいぜい) 四五人ぐらいをつれて、まだ暁方においでにな
る。(でかけてみると、行者の僧房は、北山を) やゝ深く入る
所であつた。三月の末なので、都の花盛りはすっかり過ぎて
しまつていた。(しかし) 山の桜はまだ盛りで、ずん／＼分け